様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３３６０６
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６６９４

研究課題名（和文）福島原発事故後県外に避難した育児中の母親の福島に戻ってからの思いの変化

研究課題名（英文）Changing thoughts after returning to Fukushima of child-rearing mothers who evacuated to other prefectures after the Fukushima nuclear power plant accident

研究代表者
小川　紀子（OGAWA, Noriko）

佐久大学・看護学部・非常勤

研究者番号：２０７５７１７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、福島原発事故後、福島県外への避難を経験した育児中の母親の思いについての継続研究として、福島原発事故発生から3年目と5年目時点における福島県外への避難を経験した母親の福島県に戻ってからの思いを明らかにすることを目的に、福島原発事故後、県外避難経験がある、福島原発事故発生から3年目の時点で福島県に戻っていた母親で、かつ福島原発事故当初乳幼児を育てていた母親6名に半構成的面接を行った。その結果、子どもへの放射線の影響に対する心配が継続していたことなどが明らかとなった。放射線という問題が解決していない状況からも、継続的かつ長期的な視点で、母親の生活や育児への支援の必要性が考えられた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was clarify the thoughts after returning to Fukushima Prefecture of child-rearing mothers who evacuated to another prefecture at the 3rd and 5th year from the Fukushima nuclear power plant accident as a continuation study on the mother's thought of child-rearing mothers who evacuated to another prefecture after the Fukushima nuclear power plant accident. I conducted semi-structured interviews with 6 mothers who had evacuated to another prefecture after the Fukushima nuclear power plant accident and later returned to Fukushima Prefecture as of the third year since the Fukushima nuclear power plant accident and were rearing children in their infancy. The interviews revealed that worries about the effects of radiation on their child(ren) continued. Even from the situation that the problem of radiation has not been solved, my findings suggest the necessity of supporting mothers' lives and child rearing was considered from a continuous and long-term perspective.

研究分野：基礎看護学　災害看護

キーワード：災害看護　　福島県　放射線　母親　育児

１．研究開始当初の背景

東日本大震災後、東京電力福島第一原子力発電所事故（以下、福島原発事故とする）による原子力災害が起こった。この福島原発事故により、子どもを放射線による健康被害から守りたいという思いから一時的に県外避難をし、その後福島県に戻って育児している母親がいる。県外避難を経験した母親は、県内に戻った福島原発事故から3年目において、子どもへの放射線による健康被害に対する不安や心配を抱えながら福島での生活を送っていた（小川，2015）。こうした母親の思いは、低線量によって受ける健康被害について明らかにされていないことや、細胞分裂が活発である子どもは、放射線感受性が高い（柿沼ら，2014）ことが要因となり生じていると推測される。また、母親は、避難経験のない母親との人間関係に悩み、拭いきれない放射線への不安を抱えていた（小川，2015）。現在においても放射線の問題が解決されていない中、福島県で育児している母親は、不安や心配、悩みを抱えながら生活を送っていることが予測される。しかし、県外避難を経験した母親の思いに焦点をあてた研究は少ない。また、福島県の母親の思いに関する研究は、断片的な研究のみであるため時間的経過を追って母親の思いを明らかにしていない。そこで、県外避難経験のある母親の避難前、避難中、福島に戻ってからの思いに焦点をあてた研究（小川，2015）をさらに深め、母親への支援のあり方を検討する資料を得たいと考える。

２．研究の目的

本研究の目的は、福島原発事故発生から 3 年目と 5 年目時点における福島県に戻ってからの福島県外への避難経験のある育児中の母親の思いを明らかにすることである。

３．研究の方法

(1)研究デザイン

本研究は、半構成的面接による質的記述的研究である。

(2)研究参加者

福島原発事故後、県外避難経験がある福島原発事故発生から 3 年目の時点で福島県に戻っていた母親で、かつ福島原発事故当初乳幼児を育てていた母親 6 名とし、研究協力の同意が得られた者を研究参加者とした。

(3)データ収集期間

本研究のデータ収集は、平成 28 年 8 月～9 月に行った。

(4)データ収集方法

以前研究を行った際の研究参加者だった母親に研究協力を依頼する方法と、研究参加者だった母親から県外への避難経験のある母親を紹介してもらうスノーボールサンプリング方法を併用した。研究参加者には、研究の趣旨や研究協力の自由意志などについて文書を用いて説明を行い、研究参加者の同意の意志は、同意書への署名をもって確認した。面接は、インタビューガイドに基づく1時間程度の半構成的面接を実施し、面接内容は、研究参加者の同意を得た上でICレコーダーに録音した。なお、研究参加者に対する倫理的配慮を遵守した。

４．研究成果

(1)研究参加者の概要（表 1）

本調査は平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災から 5 年後に行った。

研究参加者の平均年齢は40歳(SD±7.8、最大 50、最小 28）だった。福島県に戻った時期は、それぞれの事情に応じで異なっていたが、全員福島原発事故から 3 年目では県内で生活していた。なお、インタビュー平均所要時間は 64 分（最大 77 分、最小 55 分）だった。

表1　研究参加者の属性

事例番号		年齢	福島に戻った時期	インタビュー所要時間
1	A氏	30代	平成26年3月	59分
2	B氏	40代	平成26年4月	63分
3	C氏	50代	平成26年3月	68分
4	D氏	30代	平成24年1月	60分
5	E氏	20代	平成25年1月	55分
6	F氏	40代	平成26年3月	77分

(2)県外避難経験のある母親の思い

母親の思いは、育児に対する思いと母親自身の思いの2つに大別された。以下、カテゴリーを【】、母親の語りを斜字で示す。

①育児に対する思い

a. 子どもへの放射線の影響

3年目では、【子どもへの影響が心配だった】思いがあった。

5年目では、母親は福島に戻って生活している中でも、子どもへの放射線の影響は大丈夫だろうと思っても【子どもへの影響に対する心配は継続している】状況にあった。また、甲状腺検査結果から【福島に戻ったことで子どもに影響が出ているかもしれない】という不安な思いや、将来にわたり【子どもに影響が出ないでほしい】という願いを抱きながら育児していた。また、【子どもへの影響があったかもしれない】という自責の念や、子どもへの【影響を気にしなくなっていることへの申し訳なさがある】という、自分のせいで将来子どもに影響があったら申し訳ないという思いを持っていた母親もいた。

b．子どもの生活環境

3年目では、放射線の存在から【放射線がある外で遊ばせたくなかった】【子ども

への影響の心配から外遊びを制限していた】【子どもを放射線から守りたかった】という思いを持っていた。

5年目では、【子どもの行動はあまり気にならない】【外で遊んでも大丈夫だろう】という思いを持っていた母親がいる一方で、放射性物質を取り込んでいる【子どもに影響を与えるようなものには触らせたくない】【外遊びはさせているが放射線の影響は気になる】母親もいた。また、子どもを【放射線のない環境で自由に遊ばせてあげたい】という思いもみられた。

このうち、【放射線のない環境で自由に遊ばせてあげたい】では、「*放射線があって。何もないところで遊ばせてあげたいっていう気持ちはすごく強いんですけど。（中略）なかなか行けていないかなぁみたいな。（D氏）*」と語られ、放射線を気にせず遊ばせたい気持ちを強く持っていたことが示された。

c．子どもの食生活

3年目では、【福島県産は子どもにとってよくないものだ】という思いを持っていた。

5年目では、【福島県産でも大丈夫だろう】という思いを持っていた母親がいる一方で、産地を検討したり福島県産以外のものを選択するといった【子どもへの影響が心配だから食品には気をつけている】母親がいた。

d．子どもの放射線に関する検査

この思いは、5年目に限定して語られた。

甲状腺検査で【医師のわかりやすい説明があると安心できる】という思いを持っていた母親がいた一方で、【甲状腺検査結果の説明が理解できないから不安になる】【甲状腺検査結果の説明に対する不信感がある】【福島県内で行う甲状腺検査への不信感が強い】という福島県内で行われている甲状腺検査に対する不信感や不満を抱いていた。

このうち、【甲状腺検査結果の説明に対する不信感がある】では、「*説明がないと余計騙しているんじゃないか、ちゃんとやっていないんじゃないのっていうのは。信頼性に欠けるというのは絶対あると思う。（D氏）*」「*こっち（福島県）で受けた時って何を心配してんのっていう感じなんですよ、先生の態度が（中略）何心配してんのって言われたんですね、私。（E氏）*」と語られ、甲状腺検査結果は信頼できないという不信感が示された。また、【福島県内で行う甲状腺検査への不信感が強い】では、「*一変している感じ、すごいしますよね。むしろそういう（子どもに影響が出ている）ふうになってほしい実験のためにみたいな感じのなんか、考えられてなんか思っちゃって。（中略）いろいろ調べたいっていうか、なのかなぁって思って。（F氏）*」という、単なるデータ集めのための検査のように思えることから生じた不信感が示された。

②母親自身の思い

a．生活環境

3年目では、福島での生活の中で、【放射線はなるべく避けたいという気持ちがあった】。

5年目では、福島での生活をしているうちに自然と【放射線はあまり気にならない】状態になった母親がいた。また、母親の中には、【福島で生活するための判断基準ができた】【放射線のことは気にしないように意識する】という福島で生活するための対処をしていた。一方で、家族の気持ちを考えると【福島から離れたいが選択できないもどかしさがある】という思いを抱いていた母親もいた。

このうち、【福島で生活するための判断基準ができた】では、「*自分の信頼している人達(中略)普通に暮らしている中でお友達もいっぱいいるわけで。その人達の生活ぶりを見ていた時に、きっと大丈夫なのかもしれないって思うことが増えていったんだろうね。（B氏）*」と語られ、他の母親の生活ぶりが判断基準の材料となり、福島での生活に対応できるようになっていたことが示された。

b．人間関係

3年目では、周囲の母親の状況がわからないため、【母親との放射線に関する会話は避けていた】り、放射線のことを話すことに引け目に感じて【避難しなかった母親に放射線に関する会話はできなかった】状況の中で、母親は生活していた。

5年目では、放射線の心配がないため【避難しなかった母親との会話には困らない】という思いを持っていた母親がいる一方で、避難していたことでお互いに素性がわからないため【避難しなかった母親との距離をおいて対処している】【避難しなかった母親に放射線に関する会話はしにくい】という状況が継続していた母親もいた。しかし、【同じ境遇の母親とのつながりが支えとなっている】【同じ境遇の母親とは気兼ねなく会話できる】状況にあり、避難経験のある母親との関係性に支障は出ていなかった。

このうち、【避難しなかった母親に放射線に関する会話はしにくい】では、「*（避難しなかった母親とは）ぎくしゃくはしていないんですけど、例えば何か言ったことでぎくしゃくする恐れがあるので、あえて触れない。（D氏）*」と語られ、避難しなかった母親との関係性が崩れることへの懸念から生じていたことが示された。また、【避難しなかった母親に放射線に関する

会話はしにくい】では、「*その話(放射線に関する内容)が話題にならないんですよね（中略）もともと動いていらっしゃらない方は、普通に多分生活しているから、その質問がまずねって思うんですよね。（C氏）*」と語られ、放射線に関する質問がしにくい状況にあることが示された。

(3)考察

母親は、子どもへの放射線の影響を心配する思いを持ち続けていた。子どもの生活環境では【放射線がある外で遊ばせたくなかった】、子どもの食生活では【福島県産は子どもにとってよくないものだ】という思いから、5年目では【外で遊ばせても大丈夫だろう】【福島県産でも大丈夫だろう】という思いに変化していた。この変化は、周囲の母親の生活ぶりを参考にするといった、母親自身が知識や情報を得ることによって福島で生活するための判断基準を持ったことが要因として考えられる。このような思いの変化がみられるものの、母親は大丈夫であると確信するまでに至っていないことから、子どもへの放射線の影響を心配する思いを持っていた可能性が推測される。また、子どもの生活環境、食生活の思いに共通している内容は子どもへの放射線の影響だったこと、そして、放射線の検査に関する不信感や不満を抱いていたことは、母親の子どもへの放射線の影響を心配する思いが根底にあったことが窺える。さらに、母親は、将来にわたり【子どもに影響が出ないでほしい】という思いを抱いていたことから、今後も子どもを心配する思いは継続していくことが予測される。しかし、こうした思いを持っている中でも、母親は福島での生活に対処する力を持っていた。したがって、子どもへの放射線の影響を心配する母親の思いを理解し、母親にとって福島での育児や生活に対処するための必要な知識や情報を提供していくことが求められる。

放射線の検査に関する不信感や不満では、福島に戻ってからの母親の思いを福島原発事故から3年目に調査した結果（小川，2015）として、放射線に関連した専門的な情報が不十分であることへの不満が挙げられていたことから、母親が継続して抱いていた思いである可能性が高い。母親は、子どもへの放射線の影響を心配し、【福島に戻ったことで子どもに影響が出ているかもしれない】【子どもへの影響があったかもしれない】【子どもに影響が出ないでほしい】といった複雑な思いの中で、放射線に関する検査、すなわち、子どもの甲状腺検査を受けていると考えられる。また、甲状腺検査は、子どもに放射線の影響が生じていないか医学的視点から確認できる手段となるため、母親にとって、重要かつ大切な検査という位置づけとなっていることが予測される。しかし、母親は子どもを心配する思いを理解してもらえず、十分な説明を受けられていない状況にあることから、子どもの放射線の影響への心配を軽減する方向に働いていないことが推測される。したがって、母親の子どもに対する思いに共感するかかわり、そして、母親へのフォロー体制のあり方を検討し、母親が十分な理解を得ることができるよう支援体制を整えることが求められる。

避難経験のない母親との複雑な人間関係については、福島に戻ってから継続して抱いていた思いだった。世帯外のネットワークの規模が大きいほど母親の育児不安が低い（松田，2001）ことから、母親同士のネットワークを構築するための支援が必要であると考える。したがって、母親同士が思いを語り合える場の提供を今後も継続していくことが求められる。

以上から、放射線という非現実的な問題により、安心して育児や生活ができない状況にある。そして、低線量による健康被害が明らかになっていない中、子どもへの放射線の影響を心配する思いは今後も継続するものと予測されることから、母親への継続的かつ長期的な支援の必要性が示唆された。

＜引用文献＞

① 小川紀子、福島原発事故後福島県外への避難を経験した育児中の母親の心理－避難前・避難中・福島に戻ってから－、平成 26 年度長野県看護大学大学院博士前期課程（修士課程）学位論文、2015

② 柿沼志津子、今岡達彦、西村まゆみ、島田義也、展望　子供の被ばく影響研究 2014年1月号、Isotope News、717、2014、24－29

③ 松田茂樹、育児ネットワークの構造と母親の Well-Being、社会学評論、52(1)、2001、33－49

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
小川　紀子（OGAWA, Noriko）
佐久大学・看護学部・非常勤
研究者番号：２０７５７１７４

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)